演習編　13　「デジタル時代にこそメディア史的思考を」

　【資料１】はＡさんが「メディアとインターネットにおける問題」について研究レポートを書くときに参考にしたもの、【資料２】は、【資料１】を読んだＡさんがＫ教授に話を聞き、その内容をまとめたものである。これらの資料を読んで、後の問いに答えよ。

【資料１】

　はたして「フェイク・ニュース」や「ポスト真実」は今日を象徴する言葉だろうか。メディア史研究者なら、そうした現象は日本に限っても戦前戦中からいくらでも指摘できる。一例として、欧州で第二次世界大戦が勃発して半年後、一九四〇年三月一日付の新聞内報『現代新聞批判』に掲載された五城朗「戦争ニユースは欺く」を引いておこう。五城は当時の戦時報道における「ニユース」の氾濫を厳しく批判している。

　「どんなニユースに対しても、まずな懐疑心を働かせ、くも軍事的に見て不可能は不合理な内容であれば、直ちに虚報であると看破するだけの眼識がはれば、もはや戦争ニユースも〝欺く〟ことは出来なくなるわけである。」

　この翌年にドイツ軍の優勢を信じて日米開戦に踏み切った日本の政治指導者にも、そうした「眼識」はなかったようだ。いずれにせよ、デマ報道が戦前の新聞で猛威を振るっていたように、「ポスト真実」はデジタル時代に初登場したものではない。

　当然ながら今日のメディア・リテラシーにおいても、「聡明な懐疑心」を具えた眼識を養うことは基本的課題である。しかし、心がＳＮＳなどニュー・メディアに集中的に向けられている現状では、まずメディア史的思考こそが不可欠だと私は考えている。ＳＮＳより活字メディアを信頼する態はないのだろうか。（中略）

　数年前のことだが、臨床心理学分野の講演会に講師として招かれたときのことを思い出した。私の前に基調講演をした著名な評論家は、いじめ・犯罪の温床となるスマートフォンの子供利用を即刻制限すべきだと主張した。「毎年、これで何人も自殺者が出ているのです」。

　さすがにメディア研究者として私は黙っておれず、自分の講演で挑発的にこう述べた。「本を読んで自殺した人の数の方がもっと多いのではないだろうか」。

　メディア効果研究では「①ウェルテル効果」がよく知られている。それは「ドイツ文学史上、初のベストセラー」として有名なゲーテ『若きウェルテルの悩み』に由来している。同書は各国語に訳され、主人公ウェルテルをまねた自殺者が続出したことでセンセーションを引き起こした。そのため、この小説はザクセン王国、ハプスブルク帝国などで発禁処分になっている。

　一般に「ウェルテル効果」とは、マスメディアで自殺が大きく報道されるほど自殺率が増えることを意味している。アメリカの社会学者ディビッド・フィリップスはアメリカの自殺統計と『ニューヨーク・タイムズ』第一面の自殺記事数の相関を分析して、報道が自殺率に影響すると主張した。ここで重要なポイントは、ウェルテル効果が「報道」の影響を問題にしており、「書物」や「新聞」の有害性を示す仮説ではないということである。

　一八世紀ドイツの若年たちが熱中した『若きウェルテルの悩み』は年配者に敵視されたわけだが、今日この著作は教養小説の古典として名高い。同じように、我が国でも明治期には小説が不良化の温床として批判され、大正期には映画、昭和期にはテレビ、そして平成のいまではケータイやネットが、青少年への悪影響を理由に糾弾されてきた。いずれも聡明とはいえない猜疑心からの俗論であり、メディア史的思考を欠いた偏見である。（中略）

　つまり、有害メディア論とはどんなメディアについても当てはまる万能薬の如き議論である。多くの読者は「何にでも効く薬」の広告とあれば、まず懐疑心を抱くはずだ。しかし、万能の有害メディア論には簡単に引っかかる。その虚構を見抜く眼識を養うためにも②メディア史的思考は必要なのである。

（佐藤卓己「デジタル時代にこそメディア史的思考を」より）

（注）陥穽＝おとしあな。人を陥れるはかりごと。

【資料２】

　メディアの歴史を踏まえて考えてみると、現代はマスメディアによる大量かつ一斉の情報提供から、個別の逐次的な情報発信に移り変わってきている。当然のことながらマスメディアも健在であり、主要な情報はマスメディアを頼る人も多い。一方で個別的な情報発信のウェイトは日々高まってきていることは確かだ。このような変化をもたらしたのはパーソナルなコンピューターとインターネットの登場であり、その進化である。そしてその進化をもたらした四つの企業は巨大化しと呼ばれ世界を占有しようとしている。

　ＧＡＦＡは人々にとって便利なツールやサービスを提供し続けているし、これらのツールや便利さにあらがうことは困難なように思われる。しかしながら、いくつかの問題があるのも事実である。

　情報を取得する速さと手軽さにおいてインターネットは大変便利で快適なツールである。ところがその快適さの裏側にはの問題を抱えていることを忘れてはいけない。例えば、ツイッターで人は自分が知りたい情報を流してくれる人をフォローする。ごく当たり前のことだがそこから得られる情報はあまたある情報の中で自分の欲しい情報しか集まっていないのである。フェイスブックにしてもしかり。「いいね」を押している頻度の高い人の表示頻度が高まる。結果として「いいね」でない人は自然に消えていくのである。

　グーグルにおいても誰が検索しても結果の表示される順序は同じではない。ログインして使うようになることで検索結果がパーソナライズされその人好みの情報が並ぶように最適化されている。最適化というと便利で快適さをもたらすように思われるが、逆に言うと、好ましくない情報、自分とは違う意見、自分とは反対の意見に触れる機会が奪われているということでもある。

　有り余る情報の中で自分好みの情報にしか触れない。これは多様性の欠如という問題と裏腹なのである。このような落とし穴にはまらないためには自分がたこつぼの中にいることを意識しなければならない。あえて自分とは意見が異なるが情報は参考になる人をおさえ、複眼的な思考をもつようにしなければならない。

　インターネットにおいてはなによりもそのスピード＝速報性が特徴だ。また旧来のマスコミでは得られないな視点を持つことが可能になる。ただオルタナティブな視点というのは自分に都合のいいもう一つの事実を作り出したり、排外的な主張に転嫁したり、多くの問題があることは様々な人の指摘する通りである。フェイク・ニュースの問題もある。識者によれば完全なフェイクはあまり広がらないが、厄介なのは一部の切り取った部分は正しいのに、全体を見るとおかしい情報だそうだ。全体としてみるとおかしくても一部でも正しい情報があると事実として拡散してしまいやすい。これに対応するためにはすべての情報には意図が隠されていることを意識して、情報源がどこであるかを考えて取捨選択すべきである。

　フェイク・ニュースやオルタナティブな事実に対処するためにもう一つ大事なことは感情に振り回されないことである。情報により感情があおられ、具体的行動に移してしまうことがある。誤った、もしくは意図をもってつくられた情報にいったん感情をあおられてしまうともう収拾がつかなくなる。いくら正しい情報に接したところで自分の考えや感情を変えることはもはや難しい。

　インターネットという快適な環境の中でその快適さの裏側に潜むさまざまな落とし穴を意識し、感情があおられないように注意しながら、人類が手にした過去最速にして最強のツールを使いこなそうではないか。

（注１）ＧＡＦＡ（ガーファ）＝大手ＩＴ企業であるGoogle・Apple・Facebook・Amazonの四社のこと。

（注２）フィルターバブル＝インターネットで、利用者が好ましいと思う情報ばかりが表示され、泡（バブル）に包まれたように、自分が見たい情報しか見えなくなること。

（注３）オルタナティブ＝本来二者択一という意味であったが転じて、現在あるものの代わりに選びうる新しい選択肢を指すようになった。

問１　傍線部①「ウェルテル効果」とはどのようなものか。30字以内で抜き出せ。７点

［

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問２　傍線部②「メディア史的思考は必要なのである」とあるが、どのような考え方を持つために必要か。【資料１･２】全体を読み、70字以内で説明せよ。15点

［

　］

問３　【資料２】を読んだＡ～Ｇさんの会話を読んで、本文の内容と異なることを言っている人をすべて選び、記号で答えよ。10点（完答）

Ａ　インターネットの特徴は何といっても速報性と今までになかったオルタナティブな視点だよね。

Ｂ　そうだね。テレビや新聞に比べて早いし、正確だし、今までになかったものの見方を知ることができて新鮮だよね。

Ｃ　正確かどうかはわからないけれど、テレビや新聞では得られないような情報や視点があるのは面白いよね。

Ｄ　そうだね。ただインターネットでは情報がすべて出ているとは限らないよね。全体の中から一部をうまく切り取っている場合もあるかもね。切り取られたその情報は正しいかもしれないけれど、元の状態で見ると、どうかなという情報もあるよね。

Ｅ　だからインターネットの場合はいつも情報源を考えその意図を見抜くことが大切だよね。

Ｆ　そうするとインターネットでは怪しそうな情報の場合はいつもインターネットの本文全体の文脈を考えて判断すべきだな。そのうえで自分の好き嫌いという感情を抑えて判断すべきだね。

Ｇ　人間は感情に振り回されると誤った情報に飛びついてしまうね。情報を発信するときも、なるべく感情を入れずに事実だけを発信すべきなんだね。

［　　　　　　　　　］

問４　【資料１・２】を読んで、ネットの情報に対処するには、問２の考え方を踏まえてどのような態度をとるべきだと考えられるか。50字以内で書け。

各４点×２＋10点

解答へのステップ

空欄に当てはまる言葉を本文中から抜き出そう。

１　まずネットという世界の問題点を【資料２】の中で端的に表している言葉として［　ア（６字）　］が挙げられている。

２ このことを自覚することが大切だ。

３ ［　　ア　　］を自覚して対応するためには［　イ（９字）　］ことが大切だ。

４ ［　　イ　　］ための具体的な方法を明らかにしてまとめよう。

ア［　　　　　　　　］

イ［　　　　　　　　　　　　］

［

　］

《解答・採点基準・自己採点表》

問１　マスメディアで自殺が大きく報道されるほど自殺率が増えるＡこと（29字）７点

基準　Ａ＝文末の「こと」まで抜き出していないものは２点減。

「『ウェルテル効果』とはどのようなものか」と聞かれているので「こと」まで抜き出す。

問２

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| **正**  **答**  **例** | ②何にでも当てはまる有害メディア論に簡単に飛びつくことがなく、③メディアの歴史を踏まえて、④聡明な懐疑心を具えた ⑤冷静かつ客観的な考え方。（①65字） | | |
| **正**  **答**  **の**  **条**  **件** | 正答の条件は次の５つとする。 | | **チェック欄** |
| ①70字以内で書かれていること。 | |  |
| ②「何にでも当てはまる有害メディア論に簡単に飛びつくことがない」ということが書かれていること。 | |  |
| ③「メディアの歴史を踏まえている」ということが書かれていること。 | |  |
| ④「聡明な懐疑心を具えた」ということが書かれていること。 | |  |
| ⑤「冷静かつ客観的な考え方」ということが書かれていること。 | |  |
| **解**  **答**  **類**  **型** | ａ | 条件①～⑤のすべてを満たしている解答 | 15点 |
| ｂ | 条件①を満たし、②～⑤のうち３つを満たしている解答 | 11点 |
| ｃ | 条件①を満たし、②～⑤のうち２つを満たしている解答 | 8点 |
| ｄ | 条件①を満たし、②～⑤のうち１つを満たしている解答 | 4点 |
| ｅ | 上記以外の解答／無解答 | 0点 |

問３　Ｂ・Ｆ・Ｇ 10点（完答）

問４　解答へのステップ　ア＝多様性の欠如　イ＝複眼的な思考をもつ

各４点×２

Ａネットは閉鎖的な世界だと自覚し、Ｂ意見の異なる人の情報もフォローするなどＣ複眼的な思考をもつ態度。（47字）10点

基準　Ａ＝３点〔ネットという世界が「たこつぼ」＝閉鎖的な世界であるということを自覚するという内容があること〕

Ｂ＝３点〔意見は食い違うけれども、参考になる情報を発信している人をフォローするという内容があること〕

Ｃ＝４点〔複眼的な思考をもつという内容があること〕